

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年 10月 31日

| | |
|-------------|-----------------------------|
| 派遣者氏名（専門分野） | 濱 住 真 有 （ 日 本 ・ 東 洋 美 術 史 ） |
|-------------|-----------------------------|

下記のとおり報告します。
記

| | |
|-------|---|
| 研究テーマ | 池大雅研究の視点に立った中国明清絵画の研究 —藍瑛、董其昌を中心として— |
|-------|---|

派遣期間

2011年 7月 20日 ～ 2011年 9月 17日

| | 国 | 都市 | 訪問機関 | 受入研究者 |
|--------|----------|-----|---------|------------|
| 訪問研究機関 | 台湾（中華民国） | 台北市 | 国立故宮博物院 | 何傳馨（書画処処長） |
| | | | | |
| | | | | |

派遣先で実施した研究内容

1. 特別展「山水合璧—黄公望與富春山居図特展」の見学

元末四大家の一人、黄公望（1269-1354）が、至正10年（1350）82歳の時に描いた「富春山居図」は、清代の順治7年（1650）に所蔵者の臨終に際し、その遺言によって焼かれるも、家族に救出されて、以後二つの断巻となり別々に伝世したという、極めてドラマチックな伝来を持つ作品である。今日、断巻の前半を所蔵するのが浙江省博物館、大部分を占める後半を所蔵するのが台北の国立故宮博物院である。もともと同一の画卷であった両巻が360年ぶりに台北で再開を果たすという、現総統のもとで実現した記念すべき展覧会であり、両巻が展示された第1期展示（6/2～7/31）には、とくに大陸からたくさんの旅行者が詰めかけ、連日2時間待ちの長蛇の列ができた。第1期では「富春山居図」を初め「溪山雨意図」（中国国家博物館所蔵）など黄公望の代表作や、彼が師事した趙孟頫の「鵲華秋色図」（台北・国立故宮博物院所蔵）などの名品、かつて絵の所蔵者であった明代中期の文人画家、沈周の「臨倣黄公望富春山居図」（北京・故宮博物院所蔵）、乾隆帝の跋で隙間なく埋め尽くされた同画卷の模本「富春山居図（子明卷）」（台北・国立故宮博物院所蔵／第2期も展示）などを連日見学し、不明な点などがあれば図書文献館で辞書や書籍に当たった。一方、日本の文人画研究の立場からすれば、黄公望の伝承作品と明清時代における黄公望の影響を扱った第2期の展示（8/2～9/5、会期終了後もしばらく大部分の展示を継続）により親しみを覚えた。明代後期の画家で理論家でもあった董其昌（1555-1636）の「倣黄公望山水」、明末清初の画家で、池大雅（1723-76）にもその影響がうかがえる藍瑛（1585-1664?）の倣黄公望の画帖（いずれも台北・国立故宮博物院所蔵）も熟覧できた。会期中は、日本から中国絵画史、日本絵画史（とくに日本の文人画）双方の専門家が故宮博物院に集結しており、中国絵画については御教示を得ることも多く、また日本の文人画研究の立場から意見交換を行うこともできた。

2. 特別観覧の実施

派遣期間中に特別観覧を実施させていただいた。これは、派遣者がお世話になっている日本の中国絵画史研究者の特別観覧に同席させていただいたもので、元末四大家の一人や、明代の文人画家の代表作などを熟覧させていただく機会を得た。なお当初は、明清絵画、その中でも藍瑛と董其昌を中心に特別観覧を行いたいと考え、研究員の方とご相談する予定であったが、一人の研究者が一年間に特別観覧できる作品点数に制限があること、また多忙を極める研究員の方々に、60日という短い滞在期間中に合計2回の出納をしていただくことが憚られたため、特別観覧はこの一度限りとさせていただいた。

3. その他

派遣期間中に、故宮博物院内の日本美術史読書会と、国立台湾大学文学院芸術史研究所での研究会に参加させていただいた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究の目的は、日本の文人画の大成者の一人といわれる池大雅の作品について、派遣者の中国絵画への理解を深めることにより、東アジア的視点から大雅作品への正当な評価を下せるようになることであり、中国絵画のなかでも、董其昌・藍瑛の作品にとくに注目しながら、大雅の東アジア美術史上におけるその位置を明らかにしようとするものであった。特別観覧においては、元代や明代の文人画家の代表作を拝見する貴重な機会を得ることができ、また「山水合璧—黄公望與富春山居図特展」では、第1期の展示で元末四大家の一人、黄公望の代表作「富春山居図」を熟覧でき、画面の構成力や皴法など、日本の文人画との相違を目の当たりにすることになった。一方、黄公望の伝承作と後世の黄公望受容をテーマとした第2期の展示では、董其昌と藍瑛、清代の四王（王時敏、王鑑、王翬、王原祁）、惲寿平らにおける黄公望の影響と受容が示されており、この後半の展示のさらにその先に、舶載された絵手本や、中国絵画を介した日本における中国文人画の受容と、その実践があったことが十分に理解された。現地に2カ月間身を置いて中国絵画を連日見た経験により、自分なりに中国絵画を見る眼を養うことができたように思う。今後は、今回の派遣の経験を生かしながら、池大雅を中心に日本の文人画論を展開していきたい。

派遣後の研究発表の予定

研究成果は、科学研究費、若手研究（B）「江戸時代中期における室町水墨画の位置：池大雅を中心に」（平成23～24年度）の成果報告書へ反映させていくほか、口頭発表の場も得ることができればと考えている。